

発表題目：異種間関係における「距離感」の形成
—京都市動物園におけるアジアゾウ飼育を事例として

所属：京都大学大学院理学研究科

氏名：築地 夏海

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表は、ヒトとヒト以外の飼育動物とが飼育時のどのような場面でそれぞれ交渉を試みるのか、あるいは交渉しないのかについて、アジアゾウ (*Elephas maximus*) の飼育を事例として考察する。

アジアゾウは、ヒトとの共生の歴史が長く認知能力も高いために、ヒトとゾウという異種間でどう関係が成り立つのかについて解明することが期待されている動物種である。従来、アジアゾウの生息地域である東南アジアや南アジアでは、飼育者がアジアゾウと同じ空間にいる状態で物理的な接触をしつつ飼育を進める「直接飼育」が歴史的に長く行われてきた。直接飼育の方法は、その後欧米を発端として生息地域外で成立した動物園でも導入されることとなり、飼育員は担当個体との関係構築が求められてきた。

しかし 20 世紀後半頃になると、国内外の動物園では動物福祉や衛生面の改善、侵襲性による飼育員の安全確保が欧米を中心に重要視されるようになり、その過程でアジアゾウの飼育方法は大幅な改善を求められた。現在動物園では、飼育者がアジアゾウと別々の場所にいる状態で、柵越しに飼育個体の触診や給餌を行う「準間接飼育」の導入が進んでいる。準間接飼育は生息地域の動物園や保全センターでも推奨され、移行が進んでいる。いっぽう日本の動物園を例に見ると、準間接飼育へと移行する園と、新たな飼育法に必要な施設整備のコスト面から、直接飼育を続ける園とが混在している。施設整備の難しさを理由として、現在飼育下にある個体が亡くなった後はアジアゾウの飼育を辞めると公表している園も複数存在する。以上を踏まえると、アジアゾウと飼育者との関係は、飼育方法をめぐって大きな過渡期にあると言える。

伝統的な牧畜社会についての人類学的研究では、社会主義政策や定住化政策といった政治経済的な背景から牧畜民が生業の継続を再考すべき状況に置かれながらも（例：高倉 2012 など）、牧畜民と家畜個体とが両者を認識しあい「個と個の関係」が形成されることについても報告されている（シンジルト 2012）。本発表で取り上げるアジアゾウ飼育もまた、業務の一環として大型哺乳動物を飼育するなかで、国際的な社会の流れとの協調が日々要請される状況にある。そのうえ、アジアゾウは絶滅危惧種に指定されており、保全に向けた解決も喫緊の課題となっている。

本研究の目的は、物理的な距離が広がりつつある飼育の場において、飼育者とアジアゾウ個体の両方がどのような側面で調整しながら関係を形成してきたのかを探ることにある。これにより、福祉や保全といった社会の要請の下で、ヒトとアジアゾウとの関係がいかに続いていくのかを論じる。

発表者の調査地である京都市動物園では、2017 年から準間接飼育が導入されており、保全の取り組みの一環として飼育個体間での繁殖プロジェクトにも力を入れている。本発表は 2022 年と 2023 年の夏季に実施した観察調査の結果分析に基づいて行う。

参考文献 シンジルト(2012). 「家畜の個性性再考—河南蒙旗におけるツェタル実践」『文化人類学』76(4); 439-462.
高倉浩樹(2012). 『極北の牧畜民サハ - 進化とマイクロ適応をめぐるシベリア民族誌』昭和堂.